

昭和 S P レコードで辿れば

東京音楽学校と S P レコード

S P レコード収集家 ■ 城内 實

るようになったのは、だいたい昭和十年頃からである。

こうした東京音楽学校関係者

たまたま、この夏古本屋で東京音楽学校の同窓会誌「同聲會報」を見つけて、これを買いためた。昭和十一年四月から昭和十六年九月号までのこの色褪せた会報は、筆者のような S P レコード収集家には大変貴重な資料と言える。

今回は現在の東京芸術大学音楽学部の前身である東京音楽学校が S P レコードに残した足跡について簡単に紹介したい。

東京音楽学校の生徒乃至その卒業生が歌い、同校教授・助教授陣の澤崎定之、木下保、橋本國彦、下総院一等が指揮、作曲するレコードが数多く発売され

題歌「私のパパさんママが好き」の歌詞は次の通り大変扇情的である。

お湯から上がったママさんは

もろ肌ぬいで厚化粧

パパはニヤニヤながめては

きれいになったとほめまする

私のパパさんママが好き

(三)

大日本雄弁会講談社の社長であった野間清治が昭和五年にキング・レコードを発足させたのもこうした「俗悪な」流行歌を

浄化せんがためであった。その栄えある第一号のレコードは、「君が代」と「天皇讃仰」であるが、この二曲を東京音楽学校

の木下保が他の歌手いや、声楽家といった方が正しいかもしれないと共に格調高く歌って

いるのも偶然ではなからう。「天皇讃仰」はそれからおよそ十年後に盛んになる戦時歌謡の嚆矢とも言えるような曲であるが、時代が時代だけにこのレコードの売れ行きは大失敗であり、その後キング・レコードも他社同様の流行歌路線へと転換せざるをえなかった。

(四)

手元に東京音楽学校の学生が合唱している「紀元節」、「天長節」のレコードがある。レコード自体は昭和十三年頃の吹き込みのようであるが、この歌は明治時代に作曲されたものである。歌詞の一番と三番のみを紹介する。

雲に聳ゆる高千穂の

高根おろしに 草も木も

なびきふしけん大御世を

仰ぐけふこそ たのしけれ

天つひつぎの高みくら

千代よろずよに動きなき

もとる定めしそのかみを

仰ぐけふこそたのしけれ

(二)

「尖端的だわね」、「恋の S O S」、「カフェーの歌」、「エロ・オンパレード」、「エロ行進曲」、「だって淋しいからなのよ」等々。

淡谷のり子の吹き込みによる昭和六年二月発売の松竹映画主

「君が代」、「勅語奉答」、「一月一日」、「紀元節」、「天長節」、「神嘗祭」、「新嘗祭」といった「祝日大祭日唱歌」は、明治二十六年八月に文部省から官報で告示された。もともと東京音楽学校は、文部省音楽取調掛が発展して設立されたものであり、これらの作成に音楽学校関係者が多くかかわっていた。

「紀元節」の作曲者伊澤修二は、東京音楽学校の初代校長で台湾学務部長として台湾における教育の開拓者でもあった人物である。ちなみに、講道館柔道の創始者嘉納治五郎も東京音楽学校の校長を務めたことがあり、こうした事実は大変興味深い。

(五)

昭和十一年六月の「同聲會報」上で当時の乗杉嘉壽校長は、次のように述べている。

「例へば祝祭日の式には祝祭日の歌は必ず歌つて頂きたい。是は歌はれて居ない学校が随分あるやうに思ひます。(中略)その他校歌に限らず大体皆様

も御承知の通り日本国民に歌はれる歌は『君が代』だけである。其外に国民精神を発揚すべき国民歌といふものが無い。外国へ行くと、何処の国にも夫々民族精神や国民精神を表した色々な歌があつて、あらゆる所でそれを歌つて居る。祖国愛に対する赤心熱愛とか我が民族の誇りを表現した『国民歌』が一般国民から要請されないと云ふ事はどうした事であらうか。」

乗杉校長は、「国旗掲揚の歌」、「東亜の黎明」、「皇軍慰問の歌」といった国威発揚の歌を自ら作詩したが、「同聲會報」上の彼の連載等から判断するに、彼は国粹主義ではなく、むしろ当時の多くの知識人がそうであったように、和魂洋才の修養を目指していた人物であったように見受けられる。

(六)

東京音楽学校の学生が吹き込んだレコードとしては、右に紹介した祝日歌の他に、「椰子の実」のような芸術性の高い国民

歌謡もあるが、「愛国行進曲」、「伊勢神宮の歌」、「国民学校の歌」等、やはり国策に沿ったものが多い。

また、東京音楽学校を卒業した流行歌手としては、藤山一郎があまりにも有名であるが、昭和十五年前後の卒業生はより格調が高く、芸術性の高い曲を歌った者が多かった。「白百合」、「朝」、「母の歌」といった国民歌謡を日本コロムビアに吹き込んだ加古三枝子(昭和十三年卒)、日本ビクターから「朝」、「海ゆかば」、「出せ一億の底力」を出した柴田睦陸(昭和十三年卒)、「みたみわれ」の藤井典明(昭和十五年卒、日本ビク



ター)、「ハワイ海戦」の酒井弘(昭和十四年卒、日本コロムビア)、「なでしこの歌」、「お山の杉の子」の安西愛子(昭和十五年卒、ニッタク)等がそうである。

(七)

このように東京音楽学校は「正しい音楽の追求」という使命の下、国策の一端を担うことになるのだが、一部の国民歌謡を除いて商業的なヒットは少なかった。それでも、西洋の音楽技術をもってして日本精神を謳わんと試みたことは、大変興味深く、特筆すべきことと考える。

(続く)